

野口米次郎

定本詩集

第四

表象抒情詩

第一書房

80

75

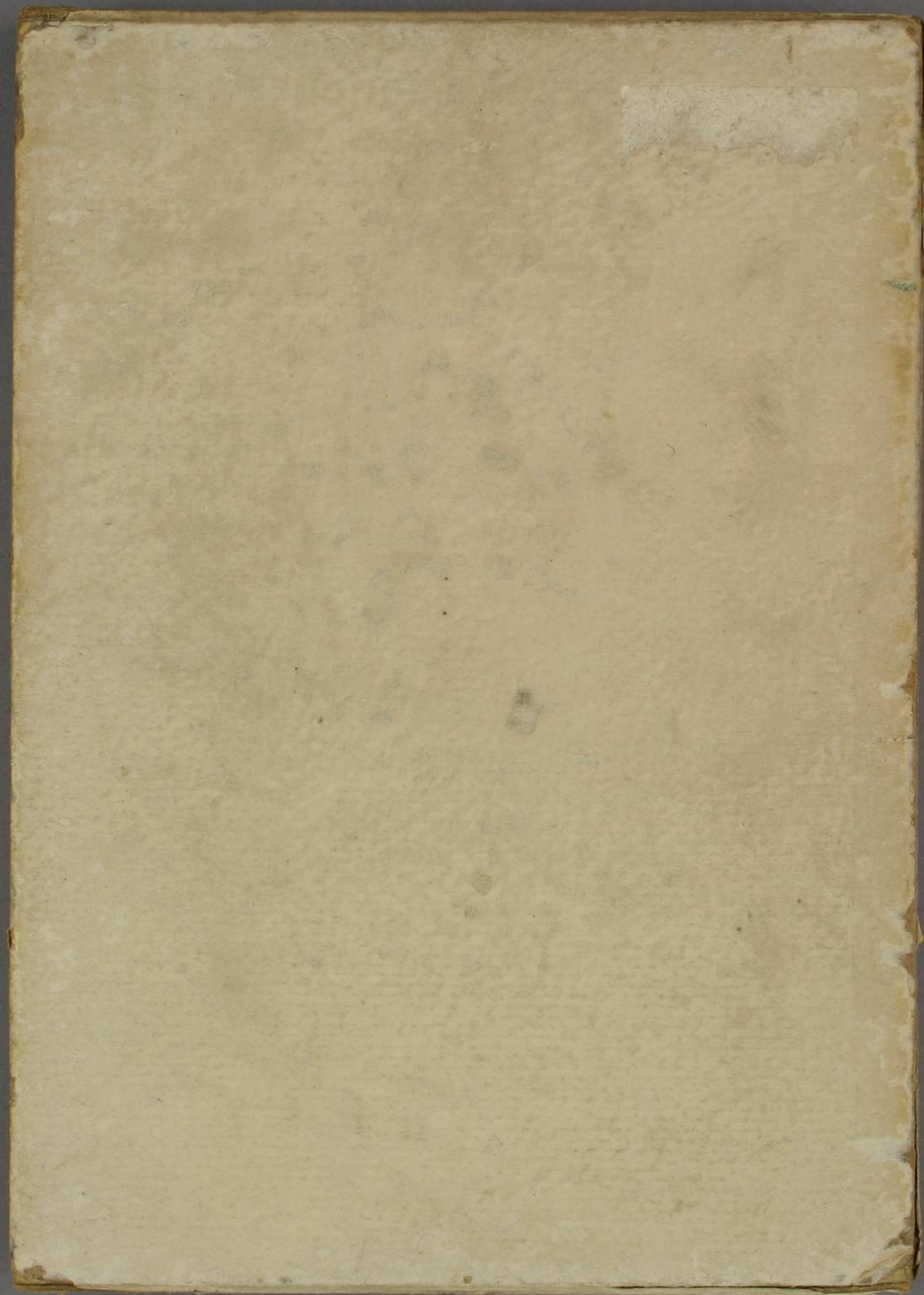
70

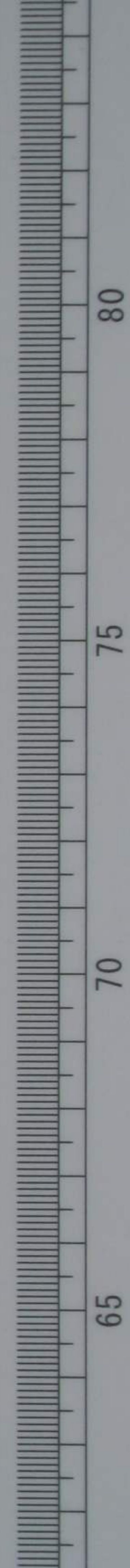
65

野口米次郎
定本詩集 第四

表象抒情詩







65

70

75

80

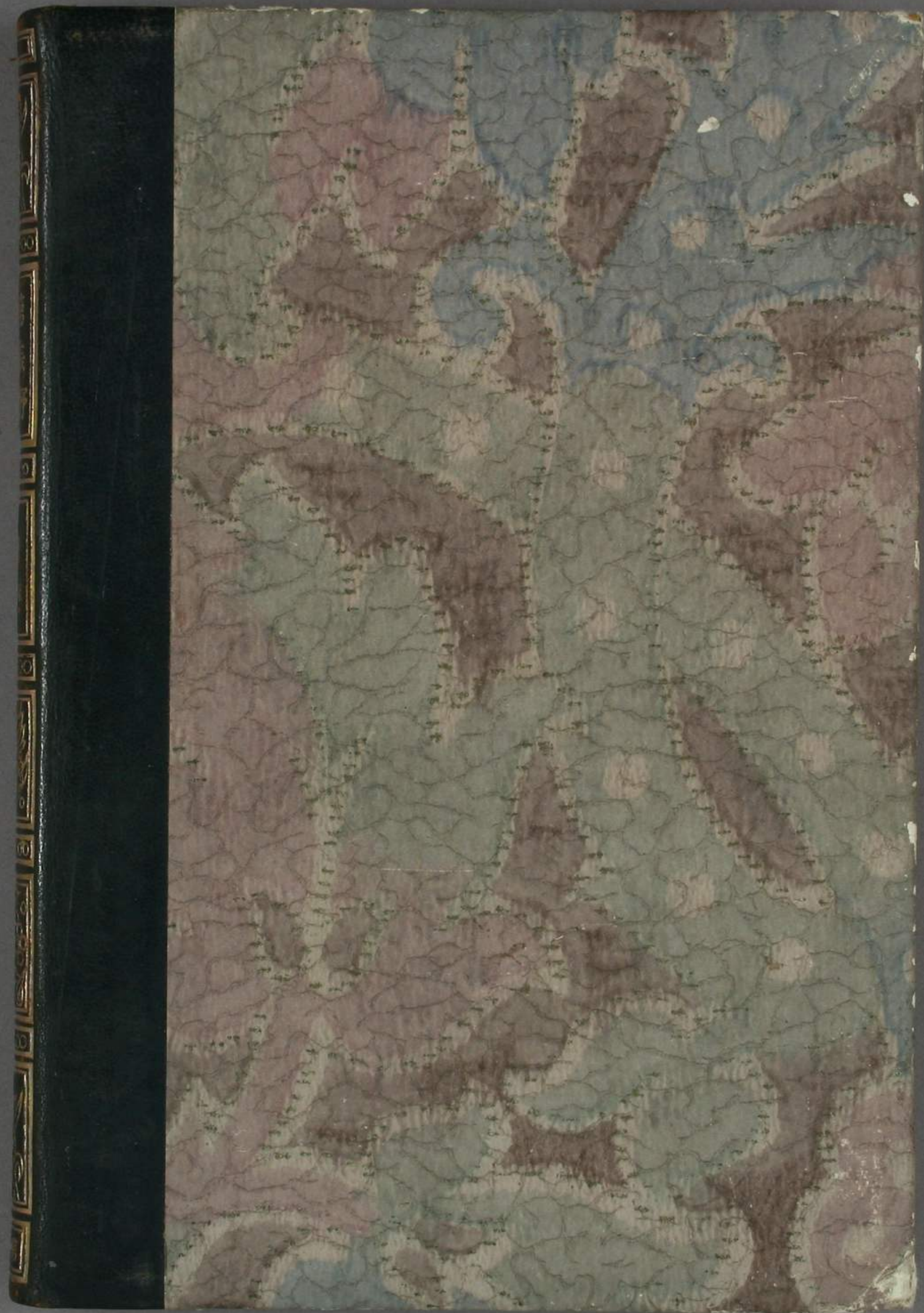


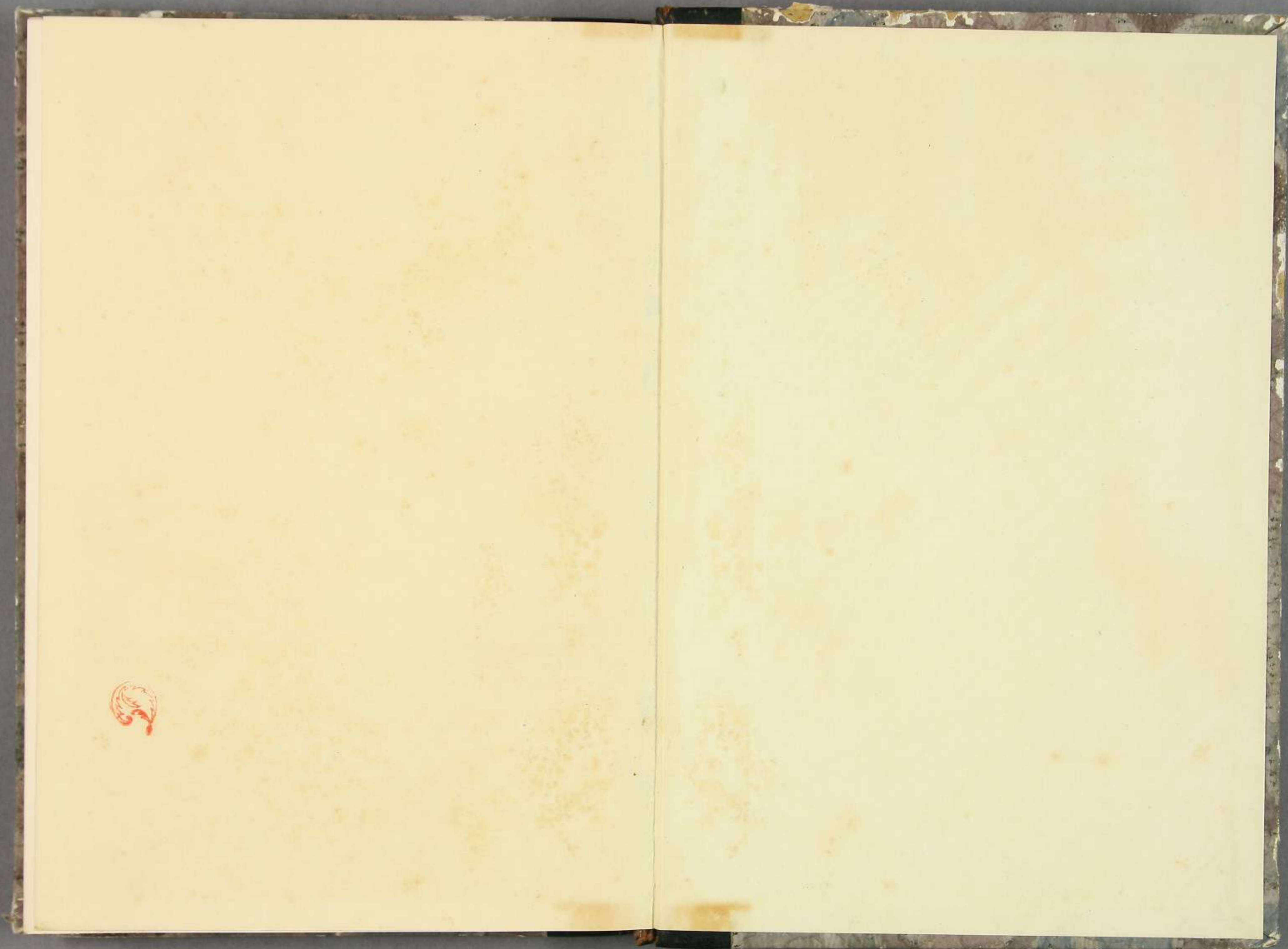
第四象
表詩精抒

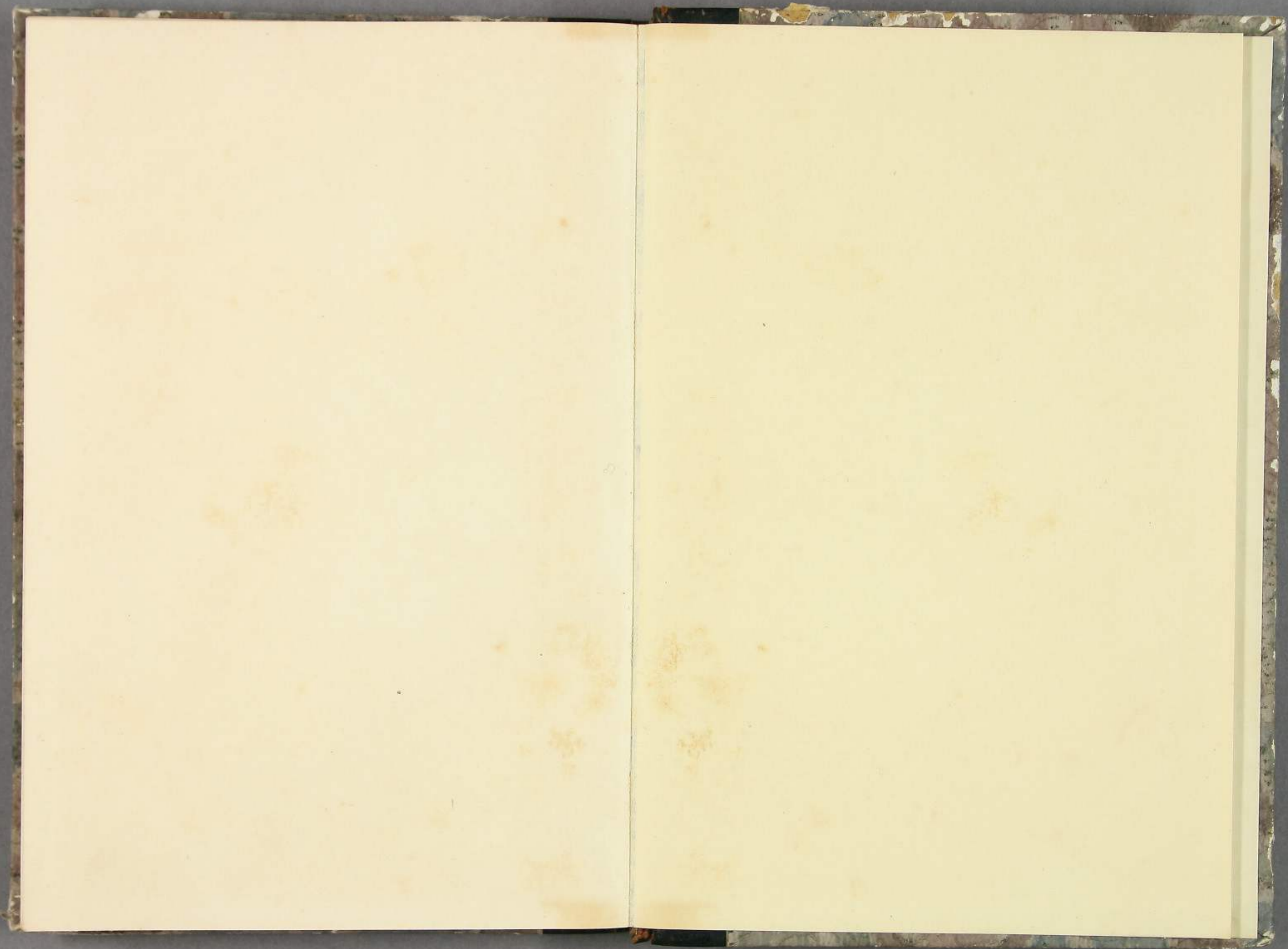
野郎
次米



第一書房







散文詩集

野口米次郎著
第四
表象抒情詩

東京高輪
第一書房刊行

目次

第一部

白紙	一六
人生	一七
薔薇の花	一八
黒い眼	一九
日没の路	二〇
手提鞆	二一
沈黙	二二

第二部

運命	二二
沙翁	二四
混亂の情	二五
寂寞の意識	二六
愛人	二七
追憶の鳥	二八
夜	二九
影	三二
群青色の空	三三
芭蕉	三四

第三部

敬意	三五
雨	三六
枯葉	三八
雨の夜	四〇
林檎一つ落つ	四四
悲哀の詩	四五
柔かな手	四六
黒髪	四八
小鳥の舟	四九
一言	五〇

松の木	五二
太陽の光線は落つ	五二
戀愛と眞理	五三
夜の兒童	五四
想像の海	五六
靜かな河を越え	五七
河	五八
薄明	五九
風	六〇
小さい歌	六一
春	六二
平和	六五

町の騒擾を遠ざかる	六八
松の木	七〇
一羽の鳥	七二
西へ	七四
風の一片	七六
愛人の鏡	七七
沈黙の搖籃	七八
夜	七九

第四部

倫敦	八二
巴里	九〇

第五部

神の恵みによつて……………九六
 太陽の下……………九七
 偏心性……………九八
 月……………一〇〇
 歡迎……………一〇二
 醜の苦痛……………一〇四
 感興……………一〇五
 藝術家……………一〇八
 新世界……………一一〇
 孤獨……………一一二

醜……………一三
 詩の正眼……………一一六
 空氣の特權……………一二二
 泣き聲……………一二六
 罪……………一二八
 無言……………一二九
 疑惑……………一三〇
 知識……………一三一
 女……………一三二
 唯一つ……………一三四
 近代の文明……………一三五
 財産目録……………一三六

曙の聲	一三七
私自身	一三八
安眠	一三九
生活の美	一四〇
私の詩	一四一
變人的	一四二
文藝復興	一四三
近代的	一四四
橋	一四五

第四表象抒情詩（散文詩）

私は善良なるもの眞實なるものの全部を私の詩に入れる。私の詩が書き終られる時私は實生活の魯鈍と無裝飾に歸る。『君は疲れてゐる、君は何といふ散文的生活をして居られるか』と人が私にいふ時位、私を喜ばせ面白がらせる場合はない。

第一部 (十四篇)

白紙

人は人生の白紙を満たす夢が無くてはならない。若し石の燈籠が如何に空地を蔽ふかを知らないならば、私共の園庭に價値がない。若し樹木が陰で地上を色取る藝術を知らないならば、畢竟樹木は何物でもない。

私の詩はただ白紙一枚に過ぎない……然し私の友人はこの白紙に自分の夢を自由に發見するであらう。若し私に藝術があるならば、それは私の友人を恍惚境に目覺めさせる招喚の聲に外ならない。

人生

人生が私の前に広がる、広がるにつれて、私の詩歌は小さく遠ざかつてゆく、然し私は遠隔が詩歌との接觸を不淨にするとは感じなかつた。嬉しい戦慄が私の肉體を動かした。

人生が私の前に広がる、広がるにつれて、私の詩歌は遠ざかつてゆくが一層明瞭に見えて来る、太陽で輝き戀愛で柔和になつて来る……その微笑、その眼附、その甘やかな實在の身振り、その毛髪は精神的優美を増す。

人生が私の前に広がる、広がるにつれて、私の詩歌は柳の小枝のやうに揺れる。

薔薇の花

私には質問も答案もない、人が私に豫期するやうな表現の用意もない。星が煌き、花が咲き、南の風がそよそよと吹く……それで十分だ。空虚を語り給ふな、瑣事を談じ給ふな、第一君は詩論を書いてはいけない。仙女を見切物にして仕舞ふ位愚かなことはあるまい。君は少くも滑稽家だ、私は君のために驚かされた。

私と共に私の花園へ來給へ、薔薇の花が咲いてゐる……然し君は薔薇も君のやうに詩を書くと思ひ給ふな。

黒い眼

私は部屋へ入る、奇異な感激や好奇心や憧憬を感じる……私がそこを去らうとする時、黒い眼の一對が北方の星のやうに煌くのを見た。

ああ彼女の口元は美妙だ、彼女の頬に接吻の麗はしい極印がついてゐる。彼女の首は象牙色に白い。

『何處かでお目にかかりましたね』と私は彼女に言葉をかける。彼女は私に答へるやうに私は感じる、『想像にもてあそばれてはいけません、私は暗黒の外何物でもない、ただもう十分間も止まるだけの生命に過ぎない。』

日没の路

君は私に左様ならを命ずる、そして『日没の路を歩め』といふ。私はその時『質問一つ』と君にいふ。君は叫ぶ、『質問無用だ、私は急ぎだ。』

私は木の間に提燈を点じ、私と共に黄昏の西へ行く人の来るのを待つてゐる。私は地上を眺める……私の足もとに葦が一つ、いな私の涙が花咲いてゐる。

手提鞆

その手提鞆を取つてくれ給へ。私はその中に香料を入れた。鞆を開けるとそれが鋭く甘やかに強くまた微妙に君の頭へしみ込むであらう。君の感情と記憶は直に苦しめられ又喜ばされるであらう。

然し私は今日この鞆を開けない。友よ、若し君が希望するならばその上によりかかり給へ……だが、君の冷い呼吸が鞆のなかの香料を石化させるかも知れない、注意してくれ給へ。

沈黙

君と私との間に沈黙が横たはる。私共は想像を傷つけないやうにしなければならぬ。私は君に對して無言だ……語るといふことは肉體の苦痛以上だ。

君は笑つて手をさし出す、私は何も云はずに君の手を握る……語るといふことは私の永遠を失はしめる所以だからね。

運命

蓬萊の島とでもいつて置かう……然しその島は何處にあるか。繪の中にか又は夢のなかにか。

私は空想を火鉢にくべる、それが煙となつて高く上る……煙が君の魂のなかに染み込んでゆく有様を眺めたい。

そら、そこへ煙が上つてゆく、煙が君を包む、煙が君の魂へ入つてゆく……一寸待ち給へ、煙のなかに君の愛人の顔が見える。

君の愛人の別名はたしか『運命』といつたけ。

沙翁

「君はホーマーを読んだかね。」

「讀んだ。」

「君は沙翁を読んだかね。」

「讀んだとも、僕は沙翁もホーマーも二度まで讀んだが……有難いことに、何が書いてあつたかまるで記憶しない。そして僕の頭は輕がるしてゐる。」

混亂の情

この光榮は地上生活のものでない……混亂の情がいやが上に密集して來る。

私はこれが天國か地獄かはたまた人生か夢であるかを知らない。私は觀察力を失つた。私は音律で苛立たされたり惱まされたりしてゐる。音律は花の如く私の胸に反影する。

この光榮はこの世界のものでない……あつぽつたい詩の影が二重にも三重にも集つて來る。

寂寞の意識

私は生れない前既に寂寞の意識に目覺めて居つたやうに感ずる。私が第一に學んだことは涙であつた。ああ、寂寞が如何に痛ましく私を嚙んだであらう。私は獨り樹木の暗黒と涙の影との間を歩いた。

月が輝き風が吹く時、私は方角を誤り涙を浪費したやうに感ずる。

詩は私の避くべからざる行爲であつた……誰もそれを疑はぬであらう。

私は今雲の招くがままに歩き、夢と生活との間を獨り寂しくセレネードしてゆかねばならない。

愛人

愛人は花の間青く光る小河の彼方に住む。彼女の家は暗黒のなかに微動し、浮いたり消えたりしてゐる。

愛人は鬱金香の祕密と香氣との間を歩く。彼女の歩みは大地を動かし微かな苦痛を叫ばしめる。

愛人は星の間で歌ふ……虹が星と星とを橋かける。彼女の歌は星と地上の谷とを橋かける。

追憶の鳥

追憶の鳥は夜の音律につれて前へ進み後へすざり、柔かに悲しく寂しく飛び廻る。

私は何時まで假面をかぶり沈黙の愚弄に堪へねばならぬか。ああ單調の幽霊よ、灰色の沈黙よ、冀くば私から去れ。

月は上る……私は落ちる木の葉に急激な大地の痛みを聞く。

夜

私は夜の女神を祝ふ……あなたの聖き諧音は言葉なき花のやうな千年の物語を紡ぐ。あなたの尊い仕事は、満足の國を遠ざかつた心に平和を與へることだ。夜は人間に體一杯の平和を與へる、温かさうな戀愛の外衣を與へる。

女王の月の光榮ある玉座を見給へ、天國の消息はそこより來る。私は人間のなかの貧しいもの、天鵝絨色の愛歌に答へたい。ああ、夜の靈よ、天と地とを結びつける星の神龕の戸を開け給へ。

第二部 (七篇)

影

私は影を喜ぶ、輝く善美のやうに自然で、眞實な奴隸のやうに柔順で、寂寞の表象とも云へる、又瞑想の姿だとも云へる。

私の靈は自分の影の上に横たはつて、『運命』が私に立てと命ずるのを待つてゐる。私は自分の體の柱によりかかる一時の訪問者に過ぎないかも知れない。或は私の體を支配する永久の王様であるかも知れない。

私が一時の訪問者でも又は永久の王様でも、それは私に何の意味を與へるものでない。私は私自身の影と一緒に喜んだり悲んだりすることを幸福だと思つてゐる。

群青色の空

空は群青色の天井でもあらうか、どこかに立つてゐる無形の春といふ煙突から吐きだす靄もやが、空の天井の穴から入つて来て、私共の広い世界といふ部屋を一杯にする。無邪氣といふ形容詞も變だが、この靄には小兒の呼吸みたやうなものがある、恐らくそれは美の蒸發氣であらう。

御覽なさい、今四月の大地は波立たないこの靄につつまれて、私共は云はば夢の海底に潜つてゐるやうなものだ。ああ、この海底生活は喜ばしい、ここから私共は浮上らないやうにしたいものだ。

芭蕉

風は陽炎の野から吹いて来る、雲の殿堂から吹いて来る、霧で包まれる廊下から吹いて来る、幻の夢の谷から吹いて来る、天と海が溶け合ふ處から吹いて来る、風は悲みの詩を追ひ廻し、涙の世界へ灰色の歌をうたふ狂人だ。

私は耳を塞ぎ風の歌を聞かない。私の魂は私の貧しい體に住む一人ぼつちの住者だ……さぞ私の魂は寂しからう。

君は私の門前に立つ一つの勇敢な姿を見たことがあるか。それは死骸を冷い地上に横たへる破れた芭蕉の姿だ。彼は暗黒を胸に巻き勇敢にこの冷い世界を見詰めてゐたが、今彼は死んで仕舞つたのだ。

敬意

私は口を閉ぢる。時に私を支配する権利がない。私は世界のすべてから離れる。

私は私の魂の前に膝まづく貧しい修行者だ……知識を忘れ言葉を忘れ思想を忘れ生活を忘れる空虚の僧侶だ。

私は私の魂の目の窓を閉ぢる、耳の戸口に扉を築く、世界の香氣は私の魂の鼻の穴を見舞はない……歡喜悲哀、問題に返答、入る呼吸、出る呼吸も今日は私の魂を煩はさない。世界のすべてが私から遠ざかり行く。私は私の閉ぢた口を再び開かないであらう……それが私の世界への敬意だ。

雨

太い雨は眞直に霧地きりぢに静かな高い空から落ちる、如何にも大膽だ、
丁度喩へると過去といふ恐ろしい世界から送られた使者でもあるや
うな態度だ。(私は高い空といつたが、私の書齋から見える一本の櫛
の高さかも知れない。) 太い雨は何の躊躇もなく即座に地上で自分を
殺して、一音譜の頌歌を擧げる……ああ、悲劇だ……いな、頌歌だ、

いな、地面が舌鼓打つ音だ……地面があつい陽炎かげりに酩酊した口を潤す
天の甘露だ、柔かで冷たい天女の涙だ。

今この世界は冷靜になり、瘦せて見える、又精神的に飢えても見え
る……石で作つたやうな蛙の喉笛はこの世界の孤獨を代辨してゐるや
うに聞える。

疲れ切つた雲の山は左右に揺れる柳の葉のなかへ這ひつて仕舞つた
が、この柳の葉は繪に描いた官女の洗髪に似てゐる。塵のない小池の
鏡に映つてゐる平安朝時代の官女の洗髪を御覽なほ。

枯葉

秋の木葉は運命に追はれて、千も二千も無言で地上に落ちる。地面は黄色の襦袢で敷物しいたやうだ。ああ、空を拂ふ黄金色の秋の風は、夢路をたどつて永遠の静寂へ入る。御覽なさい、秋の木の葉は地上へ落ちる、飛ぶ、彷徨ふ。

私の書齋は谷間の河と變つて私は黒青い影に埋もれ、前後を顧みて、人一人も居らない孤獨の感に撃たれる。過去幾千年間に互つて生きては死んだ私の親愛なる祖先はどこへ行つたであらう。數限りのない山

や海を越えて去つて仕舞ひ、私一人をこの林中に捨てた。ああ、私は淋しい、淋しい……私はこの静死の書齋でただ獨り、思想で色づけられてゐる私の靈の木の枯葉が清淨な原稿紙へ落ちるのを眺めてゐる。

ああ、私は雪のやうに白い原稿紙へ落ちる思想の枯葉を永遠に眠らせよう。私の靈の木の枯葉よ、どうか永劫の睡眠を待つて呉れ。世界の人よ、君たちは私の思想の枯葉を賞めても又くさしてもいけない……私の靈の木の枯葉は永遠の休息を追つて、清淨な原稿紙へ落ちる落ちる落ちる。それ等は死を急ぐ詩歌の枯葉だ、無終エタニチを培はうとする思想の死骸だ。

雨の夜

雨は屋根を叩く、私はその響でびしょ濡れるやうに感ずる……私は沈黙の諧音を失ひ温い黙想を失つた。私は真夜中寂しい寢床に横たはる。雨は私の部屋の暗闇を亂し飛散させるやうに私は感ずる。

ああ、雨は屋根に釘を打つ、いな夜の暗闇に釘を打つ、いな宇宙の

沈黙に釘を打つ。

私は失はれた夜の子供であるであらうか、今は最早や私の母は私を追つて來ない。彼女の狂亂の涙は盡きた……雨はただ杉の木の枝から滴る。雨は何を語るのであるか。雨でなく目に見えない不思議な魂の無駄話であるかも知れない。

『人間は泣くために生れたものだ』とたれかが私にいふやうに感ずる。

第三部 (二十六篇)

林檎一つ落つ

『今は高潮の時だ、何か起るであらう』と私は耳語する……あらゆる聲は十分に漲りきつた正午の胸のなかへ消え、太陽は懶く、大地は黄金の空気で包まれ、蝶蝶は飛び去つた。樹木は自分の影をその袖のなかへ畳み込んで仕舞つた。

『今は高潮の時だ、何か起るであらう』と私は耳語する……小さい流れや薔薇はもの静かだ。『今は高潮の時だ、何か起るであらう』と私は耳語する。

林檎が一つポントと地上へ落ちた。

悲哀の詩

『悲哀の詩が私の最初でしかも最後のものだ』と私は詩を作る時いつもいふ。夕日は悲みの矢を投げて私の魂を傷つける。

失望と暗黒が急に世界を満さうとする、私は悲しい思想を忘れようとして泣く、恰も暴らあらしい海上を凝視する男のやうに、私は沈黙の悲劇に包まれて自分の魂を見廻はし見廻はす。風は吹き去りそして孤獨に消えてゆく。

私はいふ、『私は太陽に捨てられ自然に保護されない兒童に過ぎない。私の眼は涙の路のみを見るために開いてゐる。』

柔かな手

君の柔かな手で私に觸れ給へ……歌をうたふ砂山へ落ちる柔かな月
光のやうな君の柔かな手、柔かな薄暮の接吻のやうな君の柔かな手、
君の柔かな手は、春の山の裾を急ぐ柔かな流れのやうに柔かい。
君の柔かな手で私に觸れ給へ……私は君に觸れる時遠くへ過ぎし時

代の魂を感じる、詩歌と感情の香とを感じる。ああ、君の柔かな手で
私に觸れ給へ。

私は朝から晩までこの海岸に坐つて君の柔かな手、笑ふ海岸に打込
む柔かな水の泡のやうな君の柔かな手を夢見る。太陽は没し柔かな月
は登る、然し私は再び君の柔かな手、君の柔かな手に觸れることが出
来ない、ああ二度と再び觸れることが出来ない。

黒髪

振れや振れ、黒髪、振りふつて、何處で戀愛が深み何處で森の沈黙が密集するかを示し給へ。何處で平和がその重い羽翼を横たへ、時間が決して灰色に古びないかを示し給へ。

振れや振れ、黒髪、振りふつて、何處で空氣が蜂蜜の如く甘く影が黄金色に眠るかを示し給へ。振れや振れ振りふつて、如何に人生や王國の喜びが永劫に響くかを示し給へ、ああ、振れや振れ、黒髪。

小鳥の舟

その靜かに香ばしきこと天國の如く、春の野原は廣々として横たはる。恰も満干する海の如く赤や青の浪をうねらして、野原は微風の音律に答へる。千羽の小鳥は舟の如くに往來して春の希望を歌ひ生命の喜びを追ふ……小鳥の舟は新らしい海面に浮ぶ。

『親愛なる舟よ、如何なる外國の報道を君は齋らすのか。』

『我等の齋らす處のものは戀愛の音信のみ。』

一言

沈黙の歌をうたふ廣漠の歌ひ手よ、星よ、君に捧げる一言あり、
巨く、

『人間は冷かだ、朝になると君の聖き姿を忘れて仕舞ふ、君失望する
勿れ失望する勿れ。』

松の木

私はお前の呼ぶ聲を聞く、松の木よ、私は山上でお前の聲を聞く、
蓮の花が咲く沈黙の池で、お前の聲を聞く、松の木よ。

松の木よ、雨が降り風が吹き星が顯れる時私はお前の聲を聞く、何
の用があつて私を呼ぶのか、松の木よ、お前は私を呼ぶが何の用か。

私はお前の呼ぶ聲を聞く、松の木よ、私は盲目だ、お前の處へ行く
術を知らない、松の木よ、誰か私をお前の側に連れていつては呉れな
いだらうか、松の木よ。

太陽の光線は落つ

太陽の光線は落ちる……私は薔薇の花弁をかぐ光線の鼻を見た。薔
薇の花は夜は目に見えない、その花弁の甘いことは夜の甘さが如しだ。
太陽の光線は落ちる……私は詩歌の心を覗込む光線の眼を見た。詩
歌の心は夜は目に見えない、その聲の甘いことは夜の甘さが如しだ。
太陽の光線は落ちる……私は杯中の酒に觸れる光線の唇を見た。杯
中の酒は夜は目に見えない、その香氣の甘いことは夜の甘さが如しだ。

戀愛と眞理

美人の心は緑色に深い……そこから涙と微笑の戀愛が響いて来る。
戀愛は太陽と星の生む處だ。
美人の心は緑色に深い……そこから涙と微笑の眞理が響いて来る。
眞理は夜と霧の生む處だ。

夜の児童

夜の児童は風の胸のなかから顯はれる。……私も風の中に住んでゐる、どうして私は彼等を前に知らなかつたであらうか。

私は夜の児童と共に戀愛の森のなかで遊ぶ。彼等と共に私は小河の漣の間に微笑を見つけようとする。彼等の歌は風の歌だ、風の沈黙は私の沈黙だ。

夜の児童は急に平和の西方へその顔を向け、『光明の東が私共の黒い髪を眞赤にするかも知れない……私共はそれを恐れる』といふ。そして彼等は私に告別する、その時の歌の言葉に、

『君若し我等を再び見んとならば、

歌うたふ星をたどり、

露の小路を踏んで來給へ。』

想像の海

私は自然と甘い倦怠のうちの一つになる。私の魂は徐に眠へと消えてゆく。ああこれは地上か或は天國か。夏の香氣は自然を甘くして眠らせる、樹木と鳥は微風に耳語する。

私はいふ、『私は盲目で聾であります……ああ、私は案内人もなく獨り神様へ急ぐ旅客であります。』

おお永劫よ、幸福よ、私と愛の魂は茫漠たる想像の海で戯れる。

静かな河を越え

静かな河を越え静かな小山の彼方に私の母は影を抱いて住んでゐる。なぜあんなに小山と河は静かであらうか。私は私の母に遇ひたい……ただ風が私を呼ぶのを待つてゐる。

誰が私の母が寂しい影を抱いてゐる姿を見たであらうか、誰が彼女の香ばしい呼吸に接したであらうか。風は今日私を呼ばない、風は眠つてゐるであらう。風が私を呼ぶ時月は上つて私のために戀愛の詩を歌ふであらう。

私は月の照らす詩歌の路をたどり、静かな小山の彼方へ静かな河を渡りたい……なぜ風は私を呼んでくれないだらうか。

河

私ははるかなる山から流れ出る河を知つてゐる……河の胸には雀の影が宿る。正午近くになると少女の群れがその側を通る。河はあらゆる微笑を湛へて彼等の影を抱きしめんとする。

夕方になると霧が急に降りて来る。恰も重い外套マントルの下からでのやうに河は咽び泣く……その聲は晝間の少女を慕ふ悲しい祈禱であらう。

薄明

私は薄明トワイライトの行方を見届けんとその後を追ふ……薄明は日中の光明ハッキリのなかへ消える。私は再び薄明の行方を見届けんとこの後を追ふ……薄明は夜の暗黒ヤミのなかへ消えうせる。おお薄明よ、私に語れ、光明と暗黒とは同じものであるか。

私は歡喜から泣いたそれは昨日のことだ、今日私は悲哀の涙を流れてゐる。おお涙よ、私に語れ、歡喜の涙と悲哀の涙は共に同じものであるか。

風

私は風が秋草の陰で溜息するのを聞く、私は風が干潮ひきたばの間に死を溜息するのを聞く……秋草の陰で死んだ魂は永遠に眠る。潮は退く……私の疲れた空想も退きゆく。

私は私の影を秋草の陰と退潮の間に見るであらう、溜息し溜息する私の一つの影を見るであらう。

小さい歌

今日幸福な小さい歌が風と共に過ぎゆく。私は何處へでもそれを追ふであらう。恰も木の葉の小さい聲の如く、笑ひながら歌ひながら、幸福な小さい歌は過ぎゆく。今幸福な小さい歌はぼつたり止んだ……白い露は星のしたで落ちる。幸福な小さい歌は平和の家へ急いで眠に就くであらうか。私は幸福だ、幸福な小さい歌の行く處なら何處へでも行くであらう。

春

黄金の微風は私を接吻して冬の記憶を拭ひ取る、私の心は動搖し始める……私は青春の殿堂に鎮座する『今日』を崇拜する。私の眼は大きく開いて美の幻を見ようとする、私の軽い足は戀愛の影を追ひかける。私はただ獨り櫻の林中を逍遙する。

樹上に光あり、それは月光の集れるのであらうか。樹上に香氣あり、それは歌ふ詩歌のそれであらうか。花は唇を大きく開いて戀愛を四つの

風に散亂し、私は神祕の美に酔ふ。私の空想は生活の塵をその袖で拂つて、私は友人に別れて今雲との友情を新たに築く。

雲は地上へ降つて夢と歡喜を掘りださうとする……私の空想の足も雲の白い足の如く早い。私は私の空想を命じて空中へ上らしめ神の神祕を求めしめる……櫻花の香氣も私の空想と共に天へ上る。私は私の空想を命じて地上を走り戀愛の春を歌はしめる……小河も私の空想と共に地を走る。ああ、人生の春、日光の春、陽炎かげごの胸を横に伸ばす影のやうな春、天女の呼吸のやうな甘い春……私はその呼吸に觸れて人生を新しくするの路を見つげんとする。

何たる平和が櫻の森林にあるであらう、何たる神祕が春の殿堂にあ

るであらう。何たる熱望が私の魂に溢れるであらう……花の何たる氣高い熱望よ。運命の風が誘ふがままに平然と地上へ落ちる花の姿は尊い。死は歡喜より甘く、また戀愛よりも高尚だ。

睡眠よ、夢と詩歌の二つの世界を掛かけよ……私は今夜櫻の樹下で眠りたい。

平和

忘れもしない紐育で、千九百十一年二月四日の晩。夜は清澄な香で濕つてゐた。降りしきる雪は静かな軍隊のやうに地上へ急いだ。私は燃える火の前に足を伸べて、恰も祈禱でもするかやうに立ちのぼる黄い焰を眺め、そして側にキーツの詩集をふせた。

時は二十分もたつた。私は美と悲みの月光でも飲みほしたかのやうに心に甘やかさを感じた。私の空想は何だか知らないが形の無い不思議な或るものの姿を捕へた。急にバイオリンの諧曲が私の隣家から聞

えて来た。

鳩のやうな天鵞絨の音調の羽翼は、どんなに優美に降つて行つたであらう。私はふとこの諧曲は『平和』と題するものであらうと思つた。私は平和の夏の海へ沈んでゆくことが、どんなに壯大であらうと考へた。又その海から上つて來ることが更に壯大であらうといふことも。

バイオリンは止んだ……沈黙は白色だ、尊い祝福だ勝利だ。

俄に一個の繪畫が空中に見えた……年若いキーツが死の薔薇のすべての優美をもつて横臥してゐる、彼は死の花園から流れて來る香氣を嗅ぐ、彼は頭の上に莖の薄黒い熱情を感じながら、再び人間の歌で煩はさずに永劫に眠るといふことが如何に甘やかなことであらうと思ふ。

ああ、曙光のなかに消えゆく星の姿こそ美しい、黄金の夢のうちに死んでゆく詩人ほど美しいものはない。『ああ死は勝利だ祝福だ』と私は叫んだ。

時計は十二時を打つた。私は隣家の音楽家も私と同じ思想に動かされて居つたのではないかと思つた。彼が『平和』の諧曲を奏し終つた時、私は彼へ聞えよがしに、『おやすみなさい、左様なら——』と叫んだ。

町の騷擾を遠ざかる

彼女の呼吸に觸れると私は戀愛の道に溢れる黄金の香氣を感じる。
彼女の小さい體は私の感情で疲れる火の鞠だ。私の心は彼女を燃す一束の薪だ。

『私とお前は異身同心だ、お前は私だ』と私は云ひながら彼女を見詰める。彼女は震へる。私は彼女を抱擁し接吻する。夜は暗かつたが私は更に暗からんことを願つた。私共は世界や人間に捨てられることを願つた。私共はいつた、『今夜ばかりは星も光つてくれるな、私共は

二人だけの世界を創造したい、私共二人だけで。』

私共は町の騷擾を遠ざかり戀愛と沈黙の谷へ忍び込んだ……その谷は霧とあつぽつたい夢で蔽はれる。私共は暗黒の森林を靜かに歩んだ。私は戀愛の光で彼女の心を照らしてみた。彼女は小さい手を私の胸に置いてその浪打つ鼓動を感じた。私は彼女に赤い重くるしい接吻を與へた……それが私の最善の言葉だ。私は彼女の顔に銀鼠の霧が顫へてゐるのを感じた……それは彼女の睫毛を濡らした涙の星であつた。私は彼女の顔を拭ひ甘やかに耳語した、『泣かねばならぬ時に私共は一緒に泣かう。だが……その時はまだ來ない。』

松の木

『若しも私が風のやうに消えることが出来るならば』と私は獨語する
……。

私は浪が催眠歌をうたふこの海岸に坐り、向うの松の木を眺め如何に風が平和に消えゆくかを知る。恰も生物かのやうに松の木は前へのめり、紫色の夕方へ黙禱を捧げてゐる。

松の木よ、私は君を崇拜する、君は空や星へ歌をうたふ永劫の靈だ……君は休憩^{レスト}と信仰を胸中に堪へ、星や空へ歌をうたふことを唯一つ

の目的とする。私は君のやうな木一本と生れかほりたい。

『若しも私が風のやうに消えることが出来るならば』と私は獨語する……私は疲れてゐる。私は靜かにこの夢心地の海岸に立つてゐる。何たる柔かな夢が空氣になるであらう……紫色夢心地、私の心は次第に紫色に變じてゆく。

空間と時間を超脱する處は萬物が永遠だ、何たる詩歌が浪の聲に、歌をうたふ松の木に、消えゆく風にあるであらう。私は頭を上げて空を眺める。そこに星が一つ光つてゐる。

星よ、私は星のやうな凝視を持ちたい。私は君のやうに堅實でありたい。

一羽の鳥

灰色の森を飛ぶ一羽の鳥の灰色の聲を私は聞く……眞實の鳥でないならばそれは幻の鳥だ。おち寂しい鳥よ、お前は以前のやうに死と暗黒を友としてゐるか。私は悲哀の柱によ　かかる一詩人だ。私は香を焚き、時には祈禱する。私は沈黙の空氣をゆり動かすことをどんなに恐れるであらう。春の來ること實に遅しだ。私の魂は無聲の心を接吻してゐる。

私は枯葉のやうに沈みゆく鳥の灰色の聲を聞く……何處へそれが沈みゆくだらうか。ああ、鳥でなくて私の魂であるかも知れない。私の魂は目的もなく、何處から來て何處へ行くかを知らずに飛んでゆく。何處へ私の魂は行かうとするのであるか。

私は灰色の森を飛ぶ一羽の鳥の灰色の聲を聞く……懐しい寂しい鳥の聲よ、お前は何處へ行かうとするか、私に語れ。お前は月光の銀色した永劫の殿堂へ行くのか、薄暗い平和な母親の胸のなかへ行くのか。私をお前と共に連れて行け、私の親愛なる女よ。

西へ

私は獨り西へと帆走る……太陽も月も没してゆく西へ、あらゆる死の靈が漂つてゆく西へ。

私は西へ西へと帆走つて一つの町へ着く。

これは幽靈のやうな影の町で陰鬱の海で取圍まれた。私はここで墓場の沈黙を感じる……町は咽び泣いてゐる。

私はすべての力を失ひどうしてもこの町のなかへ踏み込むことが出来なかつた。私は海岸に坐つた……私は海の歌を聞いて身顛ひしたが、その意味を理解することが出来なかつた。

私は頭を上げて不思議な光を見た、然しそれは太陽の光でも月の光でもない。風は空へと飛ばず、恰も母の乳房を捜す赤坊のやうに地上を這ひ廻る。花は葬式の人々のやうにその頭を垂れる。樹上で歌ふ鳥の聲を聞くと、『おさらばおさらば』と響く。私は何處へ來たのであるか……私は『おさらばの町』へ來たのである。

人生は秋の墨色の一夜に過ぎない。人々は悲哀でその胸を包み、恰も無言の月光を見上げる薔薇の花の如しだ。私は愛と生命の小さい歌の音律を忘れて仕舞つた。

ああ、寂しい星のしたで旋風は町の胸のなかを吹きあれる、『おさらばおさらば』の悲鳴をあげて。

風の一片

若しも私が青海から吹く風の一片であるならば、私は南方の平野に
咲く罌子粟ポピのなかに戀愛を捜すであらう、東方の山に輝く太陽に殺さ
れた白露の涙を数へるであらう。

若しも私が青海から吹く風の一片であるならば、私は沈黙と灰色、
さては胸中に漲る心の荒廢を諸君に示し或は暗示するであらう。

愛人の鏡

月が空に上つた時、ぱつたり雨は止んだ。月よお前は火と詩歌の鞠
でない、お前は私の美しい愛人の鏡であらう、彼女は日夜その美と眞
理をこの鏡に分與したであらう。

私は今薔薇の花園に立つてゐる。私の魂は香氣となつて地上から立
ちのぼり、だんだん月に接近するやうに感ずる。おお月よ、私の愛人
の美しい鏡よ、私の魂と戀愛とを一層高尚に、お前の彼女から分與さ
れた美と眞理で結びつけて呉れ。

私は私の愛人のことのみを考へる。彼女の仕事は私の魂を黄金化さ
せることであつたが、今彼女は何處にゐるか私は知らない。

沈黙の搖籃

沈黙の搖籃から私の愛する詩人の歌が聞える、平和と記憶の無言の歌、年を知らない影の歌、永劫の霧の歌が聞える。私の愛する詩人の新らしい無言の音律、春の夕の甘やかな無終の歌、睡眠の國を照らす月のやうな愛と涙の歌を私は聞く。

沈黙の搖籃から聞える詩人の歌は、過ぎゆく雲のやうな不安と夢で私の胸を満すであらう。詩人の歌は墓場の下から上潮あひしほのやうに私の耳に聞えて来る……墓場は大きな沈黙の搖籃だ。

夜

夜の睡！ 夢の世界！

動搖の魂よ眠れ、汝の愛も富もさては汝の魂も體もすべてのものを神様に返して仕舞へ。ああ睡眠！ 何たる夜と影の歌よ。

女性の星よ今夜は歌ひ給ふな。私は無ナッシングとなつて、君のやうに輝く私の戀愛を忘れたい。ああ世界よ眠れ、天國も地獄も共に眠れ、眠れ、眠れ！

第四部
(八篇)

倫敦

大英博物館の圓天井

實際を知らない人がどうしてこの圖書館の圓天井へ上る心持が解らう。上るとしても十二月の末でもう悉皆電燈がついてゐる四時頃でなければならぬ。高い處から深い谷底のやうな下の讀書室を見下すと、幾百といふ笠を冠つた小さい電燈が机の上へ黄金色の圓光を投げて、
喩へると水溜のやうだ。又そこへ頭を出してゐる人々は、牙子を狙ふ
蝦蟇のやうだといつて置かう。考へると、今私が立つてゐるバルコニ

—の後の鐵板に諸文豪の名前が彫つてあるが、彼等が残した文字も永劫の眼から見ますると、恐らく牙子以上の價值がないかも知れない。
私は下の方から、上へ上へと眼を擧げる……ああ、廣大無邊な圓天井！
虚空の唸りと云はうか、闇の叫びと云はうか、沈黙に訶まれて體が自然にしびれるやうに感ぜざるを得ない。海の中へ落ちて、（時の意識などがどうしてあらう、）幾千丈とある潮の壓迫を感じるといつたやうな心持ちだ。

リンコルンズ・イン・フキールズ

私の眼前に文人畫の蓬萊一卷が擴げられて居る……私は激烈な人生の幹流から離れる、（故意に離れたとしても無理に離されたとしても

どちらでもいい、) 丁度一片の渦か反流でもあるかのやうな心境を
しみじみ味ふ。

ここにゐると、數百歩の處に騒々しい倫敦の中心があるといふこと
をどうして意識されよう。葉のない樹木は静まりかへる霧に包まれて、
恰も紫色の花が咲いてゐるやうだ。古い古い人間の詰らない記憶が蜘蛛
の巣のやうに沈黙の上に引掛つてゐる。

セ・テンプル

どうかこの古風な一廓を毀さないやうにして下さい、此處には灰色
の歴史を物語る方^{クワドランゲル}庭がある、泉水を吹出す芝生もある、休憩するに
いい樹陰もある、また讀書するにいい雑音を知らない庭の小隅^{ヌーグ}もある。

ああ、十字軍時代の思想が十八世紀文學と程良く入交り、静寂な大學
校街の香氣を湛へてゐる。

私はゴールドスミス^{ゴールドスミス}のやうに此處に永眠の場處を得たい、憐れなヲ
リバーよ、(カーライルは君をかう呼んでゐる) 君は得意の青チヨ
ツキの代金を支拂はずに死んだが、それを催促に洋服屋の幽霊もここ
へは遣つて來ぬであらう、又ジョンソンが投げる皮肉の鎗玉も無事に
避けることが出来るといふものだ。私は私の家の古い井戸の陰に踞ん
でゐる墓のやうに、この古風な方庭の苔の下から、天から時々落ちて
來る薄暗い秋日の影を眺めてみたい。

倫敦へ行く友人へ

君が倫敦へ着く、チェルシーあたりのテームス河畔を歩く、たぶん春の細かい雨がしつぽり眼前の光景を濡してゐるであらう。向河岸の家は靄の煙で包まれ、大様に流れる水の上を舟が滑つて行く、……これは油繪の情調でない、淡い水彩畫の諧曲だ。

君は心の中で、君の前を歩くロセチやスウキンバーンを想像するであらう、又君の後から、君の嫌なカーライルが跟いて来るのに氣づいてびつくりするかも知れない。君は歩き草臥れる、休憩のつもりで手近のカーライル館へ入る……そこに石膏で作つたカーライルの右か左の手がある、君はそれを見て、『これは僕の好きな手だ、カーライルも見直して来る……まるで白隠和尚の手だ、浮世離れた人間の手だ』

と叫ぶであらう。

今でも年取つたスコツチ女の留守番がゐるであらうが、私の好意を傳へて呉れ給へ。この女はさつと君にもカーライルのことよりバーンスの詩を語るであらう。若し君がバーンスの舊宅を見たいといふと、この女は君にイースターの割引切符で出掛けよと助言して、汽車の間表まで持出して丁寧に説明するであらう。君は今カーライル館を去る、近處の安料理店へ入つて一杯のお茶を命ずる、お茶は英國人の心のやうに寧ろ鈍重な味で口當が悪い、然し君が一二年も倫敦で住むと、このお茶と同様に鈍重な英國人を好くやうになるであらう。

北の入口を入ると政治家連の側堂だ、

これがチスレリーであれがグラッドストーンだ、

だれも此處で半ばの敬意と半ばの皮肉を感じるであらう。

さあ、そろそろ歩いて詩人どもの場處へ行かうか——倫敦を數千哩も離れて、時代を幾百年も溯つたやうな氣がする。テニソンは地味な力と修養の魔術で人を壓服したと聞いてゐるが、この彫像を見ると、矢張婚禮菓子とでもいつたやうな感じがしてならない。チャウサーに胸像のないのも至極結構だ、御覽なさい、大きな大理石に名前だけが彫つてある。

咳拂ひするものは誰だ……私共はジョンソン博士の前に立つてゐる、

博士としては平凡な咳拂ひだ……一つ賑やかに笑つて、文豪諸君を眠から目覺めさせてやつたらどんなものだらう。ゴールドスミスは、本に書いてあるやうに醜男子だ……あの獅子鼻を御覽なさい、それでも着物道樂であつたさうだから笑はせられる。

君この向うは王室ロウヤルファミリーの墓地だが見る氣がありませんかね、椅子で眠つてゐる役僧から入場券を買はねばならないが、代價は六片で、日本金ざつと二十五錢だ……死んで仕舞へば英國では、平民と王様との相違は僅か二十五錢に過ぎないと見える。

巴里

ルクセンブール公園

公園の中を歩くのは田舎者ですて、よろしい、それでは急仕込みの
パツシアンで、外側の敷石を歩かう……散歩の目的で……散歩に目的
なんて野暮も骨頂だ、私共がヴェルレーヌの銅像を眺めたのも、全く
偶然であつた。私共は聞くとともに騒々しい鳥の聲を聞き、急に夕
立模様と變つて来る空を見上げて驚く……巴里でも倫敦のやうに憂鬱

に沈む時があると見え、あたりの樹木は黒ずんだ澁面を作つて身動き
もしない。

私は心の中で思つた、『かういふ日でもあつたらう、第一革命時代
に血生臭い野蠻人が門内へ暴れ込み、木をへし折つたり、火を點けた
り吠鳴つたりする、一方貴族の御簾中では喫驚する仰天する氣絶する
……あれ、青い顔のお姫様の幽霊が向うの木の影でちらちらする。』
到頭雨がどかつと降つて來た——走るなどはパツシアンらしくない
て、よろしい、それではぶ濡れになつて優々歩くとしよう。巴里子
でも雨宿りするのを見てほつと一息つき——私共は廣いオデオン座の
軒の下に入り、其處の本屋をひやかし始め、カルサビナ繪入の詩集を

弄つてみる。

ヴェルレーヌの銅像

寝惚けた線の顔だけならヴェルレーヌの外にいくらもあらう、だが、烈しい内部の火が彼の顔の不規則を顔一杯に食み出させてゐる。奇怪な顔だが單に野卑な顔でない、思睡と飛躍のヂレンマに懸つた顔だ。キャリエの繪よりこの銅像が詩人の實際に近いかも知れない。「ここにも多少ロダンの影響がある」と誰かが私にいふやうな氣がする……そこだ、私は巴里へ来てロダンがしみじみ嫌になつた。

いつの間にやら薄汚い雲が空を蔽つてあたりが闇になつて来る。公園内の人もちりちりばらばらに去つて仕舞ひ、鳥もただ、一羽の鳩だ

けが取残されて、ヴェルレーヌのでこぼこした大きな額に止つてゐる……ああ、外の鳥に見捨てられた寂しい鳩よ、ああ、悲惨を極めた孤獨のヴェルレーヌよ、私が感傷的になつたからとて、誰も私を咎めることが出来ぬであらう……それは通りすがりのエトランゼエだけの特權だもの。

ノートル・ダム

河淵に竝んでゐる古木屋の箱はみな錠が下り、店番一人もゐない。向岸のノートル・ダムは古びた色の詩と宗教を響かしてゐるやうに感ずる。見る間に空の色合が派出になり、この雨上り姿の巴里は私共に拗ねたり甘えたり抱きついたりするやうだ。

今私共は大伽藍の脇から後の小さい公園へと抜ける。雨に洗はれたあたりの樹木は一入の青さを増し、水の滴は枝から落ちる。その下へ二人の男が椽臺を持出し將棋を差し始める。二三分間に澤山の彌次馬が集つてああかうと指圖する。私共は今この將棋盤から歩きだし、時間を超絶したやうな顔で、セーンの河下を眺める。遙か遠方でシャンゼリゼー邊の樹木はまるで煙だ、煙といふよりは寧ろ雲だ……私はその色合の柔かさに觸れる、私は手觸りのいい絹のやうな女性的都會の皮膚に觸れる。

神の恵みによつて

私はウオター・サベージ・ランドアの傳記を読み、『神様の恵みで僕はランドアだ』の句を見出した時私は痛快を感じた。私も『神の恵みによつてヨネ・ノグチなり』と叫ぶ機會を得たいものだ。

太陽の下

西洋に太陽の下で新しいものなしといふ言葉がある。ない處か大いにこれ有りだ。

まづ以て如何に鳥が飛び、花が笑ふかを見給へ……これ位新しいものはないではないか。

偏心性

私は君の頭腦を尊敬するが、君は少しく生硬すぎやしないか、少しく平面すぎやしないか。私は君の理智を輕蔑するものでないが、君達が一様に到着する結論は面白くない。どこかにそれを逃れる道がありさうなものだと思ふ。私は異様に見える變り種であらう、時には不思議

議に思はれ、又しばしば畸形的にも見えるであらうが、私は何も君と異りたいと思つてゐるのでない。人は私を犠牲の存在と言ひ、又人は私を支離滅裂の表現だといふかもしれないが、私はそれを否定しない。ただ私の希望する處は私の個性の尊重にある……私はもつと單純にありたいといふのが私の生活の目的だ。然し人はそれを私の偏心性だと云ひたければ勝手に云ひ給へ。

月

私は自然の現象の中で、月が一番他との個人的接觸を嫌ふと思ふ。月がそれを逃避する有様は如何にも巧妙だ。月が悠然と世界の粗俗野鄙から遠ざからうとするその様子は、如何にも神經質的である、實に月の神經質は婦人的であると云へる、實もつて感覺的である。

花を見給へ、佛壇を飾る清淨な蓮の花でも、乃至は美人の幽靈を思はせるやうな百合の花でも、みな人情的である。友情の交換を希望するやうに見える。然るに、月が樹木の挨拶にも答へずにさつさと高く

上つて行く有様を御覽なさい。山でも丘でも、其力で月の行動を支配することが出来ない。雲でさへ、月の巧妙な遁逃の術に瞞着されてゐる。私は夕景獨り、野原や樹木の間を散歩して月とかくれん坊隠坊をすることがある……私は月が私の後にゐるだらうと思ふと、月は前から私を驚かせる。私が樹木の間を月を求めると、月は私の足下を流れる水泡の間から笑つてゐる。

私は逃げたいと思つても逃げることが出来ない地上の苦痛から自己を解放する祕密を、どうか月から學びたいと思つてゐる。ああ、月は神祕だ、不思議な人格だ……月位、自分獨りの路を勝手自由に歩いてゆくものは、自然の現象中二つとは有るまい。

歓迎

私が来て下さいと君にいふまで、私の家へ来ることを遠慮してほしい。私は客を迎へるに當つて、私の背景を整へねばならない……太陽の光線の落ちる工合や、影の濃淡を考へたい。人は、私が古美術か何かでもあるやうに、自分の周囲と、自分の外觀とを餘りに考へすぎると批評するかもしれない。私は批評に答へない。

夕景の鐘が鳴りはじめる。私は香を焚く、私のあらゆる自制力と嚴肅な沈黙は破れ始める……この時こそ、私が私の友に、『やつて来て

話し給へ』と通告する時である。私の自我は強烈だが、次第にその角度がとれて来て、私の生活に適當な語勢エンフアシスをつけるであらう、私は立派に美化するであらう。

私は私自身を尊敬する、私の詩歌を尊敬する、私の藝術を尊敬する……自分に拂ふ私の尊敬は應ては私の友人に拂ふ尊敬であるであらう。其時私を訪問する友人に、私の最善を盡して歓迎の行爲を示すであらう。若し私の友人が私を訪問する時とその方法を知らないならば、私は彼等にいふであらう、『月の柔かな影が地上に落ちる時、静かな風に乗つて來るのだ。』

醜の苦痛

眞實の美を見ることは醜の苦痛を體驗してからのことだ。世界人生を歡喜の姿で見ることは、その價値を知る眞の方法でない、勇敢な方法でない。私は出来るだけ嫌惡の情で世界人生を惡みぬきたい、その時始めて其等は自然であり眞實であらう。

私は語を作つていふ、『倒れることは應ては起きることを意味する、倒れるその事が即ち起きるの始めだ。嫌惡は即ち愛の半面だ。』

感興

私共は森林の下、感興の酒宴に臨み私共の遊樂を恣にする。それが幸であるか不幸であるか、善であるか惡であるか、眞面目なことであるか或は狂的行爲であるかを議論する必要を私は知らない。私は私の湧き上る感興と共に私の生命は生長する、生長する生命と共に私の詩歌が生長するといふことだけを知つてゐる……ただそれだけで十分だらうぢやないか。私共は歌ひたい踊りたい又歌ひたい。そりや時と場合では、如何にも悲哀を極め、野蠻な動物のやうに、戦ひ、議論し、斷言し、否定することがある。然しそれは私共の詩歌を、私共の舞踊

を十層倍も新しく、自由にする結果となるであらう。勿論思想は大なるものであるが、感興はそれよりも遙に大きい。思想でも、感興なく顯はれる場合は、結局死んで生れる赤兒に過ぎないであらう……如何に完全無缺に見えても、ああ、それは死んでゐるのである。感興は昔あらゆる神様や女神様を創造した。又彼等を森林の間や溪流の下を放浪させた。そして私共の近代的感興は、藝術家をして畫面に青や赤の繪具を投げつけ、忽ちに森林たらしめ山川たらしめる。感興は萬事である眞實の生命である。私は私の感興を高く飛ばしめるためには、女や酒や音楽や花や鳥にその犠牲を強ひるものである。まつたく感興の力一つで、雲は飛び雨は降る。私共は決して感興を制限する必要がな

い。ただ感興にその自然の道を取らしめれば足る。若し感興の性質が悪く無價値のもので有るならば、特別に力を用ひなくても自然に自滅し終るであらう。感興が生長する處には常に希望があり熱情がある。そして生長する處のものは何物でも神聖であるであらう。

藝術家

中古時代の日本人は、霜のやうに冷い刀で切腹する場合でも、又茶の湯の茶碗を手の上で廻してゐる場合でも、同じ態度でその生命を殺したり生かしたりした。その態度は平靜で決して急激なものでなかつた。そして彼等はどんなに無駄な争闘と無價値の饒舌を嫌つたであらう。彼等は争はねばならない場合には、刀の切先で其結論を書いた。そして彼等が語らねばならない場合には、沈黙の言葉で叙説した。彼等は靜かに注意深い眼で、人生の目的を眺め、藝術家の如く、それをめぐり、卓越した藝術家の如く、人生の目的の周圍を離れても決して

それを忘れなかつた。彼等は傳統に忠實であつて、よくその偏人氣質を表現し、偏人氣質を發揮しながら然も因襲的であつた。然し時代は私共を變化させて仕舞つた……私共は言語の力に依頼しすぎる、一問題がもち上ると、喃喃たる饒舌で賛成したり否定したりする。實に私共は不愉快な人間となつて仕舞つた。そして時には語らねばならない言葉を、恰も素人俳優のやうに人生の舞臺で忘れてどきまぎすることもある……まるで藝術にも何にもなつてゐない。ああ、どうして私共は沈黙の二字を忘れたであらうか。私共は生れない以前に歸つて、神様から沈黙を貰つて來ねばならない。ああ、沈黙の完全性を破壊する言語よ、私は汝を恐れる。

新世界

この家こそ驚くべき家で、千年たつても万年たつても變化をしない想像の家だ。私はこの家が好きだ……ここでは批評も力を失ひ、論難否定の刀を收めるであらう。この家に溢るる沈黙こそ完全である、そして人生も活動の魔力を忘れ、諸君は美と悲哀の靈と友情を持つに至るであらう。私は私自身を『想像』に委ねて、絶対美を創造するであらう。その時如何に人間生活が一瑣事に過ぎないと見えるであらう。諸君は私の家に、古い古い詩歌が新しい驚異の響を波うたせることを感じ、一度想像の力に觸れると、どんなに小さい單純な思想でもここ

に光彩陸離たる光明を放散することを知るであらう。最早や詩歌はその容積の問題でない、美の問題である。

私はこの家に住んで始めて感激と情調の時代に歸る。そして私共は一つの言葉を語るであらう……それは嘆美禮讚の言葉だ。私共は重大な新生命が開いて來ることを知り、外面的現實が最早や標準でないことを感謝するであらう。そして私共は、單に簡單な言葉の所有者に過ぎなくとも、聖なる天啓の表象となつて神も佛も我以外にないことを知るであらう。ああ、眞實な藝術の世界はここに顯れる……私共を失望させないであらう希望と感情の新世界は、その幕を開ける。

孤獨

一片の茶でさへ太陽に曝されると變色する、一挺の墨も一瓶のインクも等しくその尊い品質を失ふ。それは孤獨の保護を遠ざかり孤獨を裏切つた罪だ。

私共は孤獨の祝福を感じて存在し成長せねばならない。孤獨と終始し生死を共にしなければならぬ。私は沈黙の歌ひ手だ……沈黙は孤獨の咲かす花だ、孤獨の放散する香氣だ。

醜

私共は醜の中に、私共を感動せしめるに足る多くの美が潜んでゐることを發見する。假令漠然であるとはいへ、かかる場合の醜は、一種熱心な正調即ち希望の光を表示してゐる、其希望自身が、既に美德である。故に美其自身となる譯だ。その美德の力で、醜も半分以上、醜と思はれる分子をなくしてゐる。實際、天下に懺悔より神聖なものがある筈がない。如何なるものでも、自分の弱點、悲しむべき一面を自覺するといふこと自身が、常に美であらねばならない。結果から見ると、醜は美と云はれるものより遙に善良な光明を表現する。醜の勝利

は、美の勝利よりさらに永久的である。私共は、醜を偶然に愛して、狂妄な嘲笑を美に投げる人のあることを知つてゐる。さういふ人は醜を憐れむといふうちに幸福を感じる人である。彼の幸福は愛から生れたものだ……故に正當であるといふ確信があるので、彼の幸福は最高度のものである。ここに不思議な事は、眞實の醜は他の同情を乞ふといふやうな虚弱な存在でないことである。醜は何等不當な辯護を要するものでない。醜に興味があるといふと、必ずや反語的に聞えるであらう。然し實際は、醜のなかに美が光つてゐる。其の美が私共を平和、確定、永劫の方面へ導いて行く。近代人は、醜であるといふことは恥辱である、何故に美化しないのだといふかもしれないが、醜の方が美の方より遙に眞理にちかい。醜には懺悔の生命が動いてゐる。眞實な

生命とは、眞實な自己を見るといふことだ。美より醜の方が自分の價値を正當に知つてゐる。美は偽であり、少くとも偽であり易い……それは動かすことの出来ない事實である。私共は、醜中の美より美中の醜の方がその数が多いと信じねばならぬ。これは私の新発見でも何でもない。世界より古い事實である。私共は徐々ではあるが確實に、醜を正當に評價する時代に接近しつつある。私共の人生は醜の洗禮を受けねばならない。醜から美を蒸溜し出して、堅實な人生の營養を發見しなければならぬ、かうなつて來ると、醜は即ち醜でなくなるであらう。

詩の正眼

眼を正眼に据えて詩を見る……作詩の祕密は全くこれだけだ。銳利な注意があつても、詩の目的が達せられる筈のものでない。一番詩に充實する時は何時であるかといふに、私共の無注意（不注意でない）が完全に動いて、完全な注意の力を偶然に發揮する瞬間をいふのである。如何に無注意たることが出来るかが、むつかしい藝術問題である。人は詩を不用意の間に得るといふが、この言葉は不徹底である專斷的である。私の詩の修業は、如何に眞實に無注意たることが出来るかの一事で盡きる。私の無注意が無言のうちに動いて、完全な注意の力を

得る時、私は一層明瞭に私の詩眼を据えることが出来る。私が詩と共に合一して居ればこそ、私は全然詩を忘却する事が出来るのである。私は詩を全然忘れて始めて眞實の詩を得るのである。私は詩を作らうと思つて、未だ曾て詩を得たことがない。

私が詩の實體を握つた時は、詩其物と一であるから、特別詩の存在を認めようとしないのである。さういふ瞬間に、私の心の感觸や情の衝動は確定する……私自身が即ち詩であると自覺するのである。實に詩の問題は、私にとつては神経の問題であるに他ならない。然し眞實の詩は神経の力だけでは得られない。神経が其自身を忘却し得た特殊の瞬間に、始めて眞實の詩が顯はれるのである。人は、詩をして自ら書かしめよといふ……それは詩人が眞實な自分を握らねば駄目だと

いふ意味であらう。作詩の秘密があるとするただこれだけである。

詩は私自身を見出させるから、詩が私には興味が深い。詩は、私自身と自然との関係を教へるから、詩が私に必要である。詩は、私を哲學的にする、故に詩が私には一面教訓的になるともいふことが出来る。哲學的になつて、初めて私自身の性格を建設することが出来る。人は、哲學の教へる沈黙の意味を了解して、始めて人間性格の至純な基礎を置くことが出来るのである。

私は私が公にした英詩集幾冊を眺めながら獨語する、「私の詩は眞實の詩だと敢て云ひたい。私の詩は皆「詩を嫌ふといふ感情」から生れたものだ。詩に對する私の愛が上昇して激烈となると、其結果突然

に嫌惡の情と一變する、其瞬間に出る聲が私の詩だ。眞實の愛と詩の嫌惡とが交叉する瞬間に私の詩が有る譯である。私は私に詩が出来ること、恰も誘惑の結果、一罪科を作つたやうな感に打たれる。私は其罪を恐れ、悔ゆるやうに、私は私の作つた詩を顧みない、或は詩から顧みられるのを私は欲しない。私の詩は、畢竟私自身の靈の暴露に外ならないのである。世間には、所謂詩の愛著者と自稱する人が澤山ゐるが、私は其等の人を必ずしも私の味方だとは思はない。實際、詩を嫌ひ得る人が、眞實に詩を愛する人だと思ふ。詩を嫌ふといふ言葉の中には、詩を愛するといふ言葉の中よりは、遙に深い眞理が潜んでゐると信ずる。眞實の愛はいつも眞實の嫌惡から生れるものだ。愛と嫌惡とは姉妹關係である。私は詩を嫌ふ人が、私の眞實の友人だと考へ

る。故に私は聲高くいふであらう、「詩を嫌ふ者よ、來給へ。私は詩人として如何に詩を嫌ふかを語らう。眞實な嫌惡の力で、詩をして自分の眞價を示させよう。」』

ロセチは愛の解釋を美の中に發見したが、美の何物であるかを語らなかつた。これは恐らく、曖昧不確な彼の心意の爲めか、或は人を瞞著する程器用過ぎた爲めかであらう。美(?)が凡ての物であると信ぜしめて、幾百幾千の小文學者をあやまらしめた罪はキーツと等しく中々軽いものでない。ラスキン先生は、美は、平凡な我々生活の缺陷をさらけ出す燈火であるとした。故にロセチより遙に健全である。然し我々生活の缺陷とは如何なるものか。私は美(詩といつても良い)に依つて、我々物質的の人生の美と其完全とを表現せしめたいと思ふ。

私が詩を作る所以は、もつと熱烈にこの物質的の人生を味ひたいからである。私は人生の物質的存在に愛著する。私が嫌惡の情に達し得るやうな詩の瞬間を持つことが出来るため、私の物質愛が一層豊富になると感ずる。私は詩を嫌ひたい、私は詩を愛したい。詩を嫌ふといふことと即ち詩を愛するといふことだ。私は平凡な物質生活を謳歌する。私が物質生活を重視する所以は、畢竟私が私自身の生命を重大視する理由に他ならない。

私はいつも詩論を否定してゐながら、たうとう詩論を語つて仕舞つた。私は、人間は矛盾であることを悲しみ且つそれを喜ぶ。

空想の特権

私は幼少の頃、他の少年もさうであつたであらうが、義朝の九男牛若丸の敬慕者であつた。夕日が西山に傾く頃になると、遙に思ひを鞍馬山の奥四邊物寂しく松の風梢を拂つて時ならぬ雪が降り、哀猿雲に叫ぶ間、頭に大兜巾を戴き山伏姿に羽團扇を携へた鼻の高い大天狗に

兵法の奥儀を習つてゐる源氏の公達を想像した。私の郷里から西へ去る三里の處に多度山といふ小高い山があつて、私はしばしばこの山へ登つたことがあつたが、天狗らしい老人がその頂上近くの一軒家で火を焚いてをつたのを見たといふ一友人の言葉を信じて、ある年の多度登山では、連れのものに離れて一人あちらこちらと寂しい樹の下や岩の間を徘徊うて、鼻の高い羽團扇持つた大天狗を見出さうとしたこともあつた。また私の郷里はその地方で有名な午頭天王を祭つた神社の所在地で、その境内は樹木茂つて晝なほ暗しといつた有様であつた。夜になると天狗共が高い松の木の枝に火を點ずるかもしれないと空想を懐いて、そつと家を抜け出して獨り神社の境内を彷徨したこともあつた。私の少年時代はかかる放恣な想像で満ちたものであつた。

或日私は父に何かの理由で痛く小言を云はれたのが癢に障つて、家を怒つて飛びだし、『もう歸つて來ない』と捨て臺詞を残した。時は丁度夕景で、眞赤な夕日に燃えた多度山は私の小説的空想を煽り立てた。私はその時耳にありありと天狗の言葉さへ聞えたやうにさへ感じた。私が飛びだして向う處は、確に私に兵法を教へて呉れるであらうと思つた多度山の天狗の棲家であつた。私の母は驚いた、十町ばかり離れた天王川の土手の上で私に追ひつき、無理矢理私の腕を掴んで私を家へ引摺つて歸つた。

ああ私は遂に天狗に出會する最後の機會を逸し去つて仕舞つた。其後私は高等小學に入り英語を學ぶやうになつて、私の天狗熱も段々と冷却して行つたが、今日でも時には少年時代の空想に立ち歸ることがある。

ある。若し其時私が母に伴れ歸られず、私が首尾よく多度山の天狗に弟子入りをしてをつたならばどうなつてゐたであらうと思ふことがある。人生の祕密を教へて遣るから來いといふ柔かい聲を私はどこにも知れない遠方の山から聞くやうに感ずることがある。

然し今日ではとても兜巾姿の天狗に出會ふ機會はない。空想の特權は少年だけに與へられてゐる。私は今その特權を失つてゐる。

泣き聲

私の生れた時どんな有様であつたか私に知りやうがないが、私の妹の生れた時の朧げな記憶が私に有る。何でも夏の晩で紫色の空に星が澤山散らばつて居つたと覺えてゐる。夏のことであつたから部屋に張つてあつた蚊帳を風が動かし、座敷の軒端に岐阜提灯が吊してあつた。恐らく盆前後の一夜であつたであらう。何でも提灯の火が消えた頃私は眠りに落ちたに相違ない。私は眞夜中急に赤坊の泣き聲を聞いて目を覺ました。私はその聲を聞いて自分が既にで兄あることを知つた。

私は私の妹の最初の泣き聲が三十幾年後の今日でも、私の耳のどこかに残つてゐるのを感じず。赤坊が如何に生れるかを知る必要がないが、私はその最初の泣き聲に注意を拂ひたい、それが赤坊の存在を説明するのに十分である。

私の妹の最初の泣き聲、彼女の最初の極めて鮮かな泣き聲！ 私は私の存在を證明するため私の眞實な泣き聲を持たねばならない。その泣き聲は私が母の胎内を飛び出した時に發したやうな泣き聲であらねばならぬ。

罪

人間の罪だけは年を取らない、永遠に變化をしない、その特異性は單純だ。昔から罪を犯した人間の歴史は永劫に若い。彼等の一般的道徳を嫌つた態度は、いつも私共に近代的な感じを與へる。人間の徳性は時代に應じて變化する、進化する、少くも展開してゆく。故に徳性は罪惡のやうに力強くない。

無言

人が意見を餘り多く持たない時、又その意見が薄弱であるので見出す時、人は盛に自分を主張し自己の意見を他に強ひるであらう。實際その意見が充實して強い場合には、人は毬たまごに實が一杯満ちた栗のやうに、靜かに、無言を満足して味ふ。

空車は無暗と音を立てる。春夏秋冬の四季は無言に循環して毫もその跡を留めない。天は常に蒼々として無言の状態を維持してゆく。

疑惑

私は嘗て疑惑を私の一大仇敵であると思つた。然し今では眞實に疑ふことは眞實に信ずることになると感ずるに至つた。かうなると以前の敵は今日の友人だ。

實に疑念は信仰そのものより遙に人情的である、その生命は強い。苦痛は喜悅より更に實際であり遙に眞實である。人は或は私のバラドックスだといふかもしれないが、私は『疑惑のうちに信じ、信仰のうちに疑へ』といふであらう。

知識

知識ウイジドムの魂は悲哀であり苦痛である。知識が學校の講堂から這ひ出て來る老碌頭巾の老教授であると思つたら非常な誤りだ。チエスタートンであつたか、近代の淺薄な學者を冷笑してペンギン・プロフェッサ―と呼んだ。

知識は有らゆる處罰を拂ひ終つた改心の犯人である。惡が懺悔から聖人と變じたものである。

女

西洋でも日本でも女は所謂模様美として價值づけられる場合が多い故に藝術品として女は最高位に達することが出来ないと言へるであらう。

女は男子に比較するとその大部分は物質的に傾いてゐる。もとより

女で精神生活の歴史を書いたものもないではないが、その動機を調べると、不幸と失敗とを匿さうとするのに原因してゐる。女は生來赤裸になることが出来ない。女は自分を匿せば匿すほどその模様美が増して来るやうにさへ感ぜられて来る。十六夜日記の著者は赤裸に近い表現の女であつたであらうが、清少納言の如きは自分を顯さうとして却つて自分を匿すに至つたといふことが出来る。

唯一つ

西洋では玉子料理に三百六十五の異つた方法があるさうだが、エス
とノアの語り方は唯一つあるのみだ。

私共日本人はお辭儀の仕方が百あつても、坐る目的は體の安靜をは
かる一つあるのみ。

近代の文明

私がある西洋料理屋で一杯の珈琲を飲んでみると、隣りの椅子に坐
つてゐた一青年がその友人に、『君は餘り議論し過ぎる』と叫ぶのを
聞いた。日本も今日では『議論し過ぎる』の文明の程度に達したであ
らう。半世紀前私共は野蠻人だと稱せられたものだ。事實今日私共は
知識の重荷を感じて不愉快ならざるを得ない。善惡の問題は別として、
私共は近代文明の墮落の罪を分擔して尊い人格を失つて仕舞つた。私
は五十年前の野蠻時代をひたすら羨ましく思ふ。

財産目録

その方法は問題でなくて如何に目的を達するかが主要の點である。船頭多くして船山に上るといふ諺がある、政争にせよ文藝にせよ如何なるものでも、今日墮落し終つたかの感があるのは畢竟その船頭が多いからである。私共はただ方法だけを議論して目を暮してはならない。私はいふ、『日本今日の時代は貧弱だ、果して何物を私共の財産に附加へたであらうか。』考へると唯一着のフロックと倫敦あたりでは舊式極まる帽子一つだけ財産目録に殖えたのみであらう。

曙の聲

世の中で幾人が果して、眞夜中に曙の聲を聞くことが出来るであらうか。烏が鳴いても朝だといふことを知らない人さへ居る。

私自身

私を隠し得るだけの深い山は何處にあるだらうか。私を呑み得るだけの大きな川は何處にあるだらうか。私がかういつたからとて、私が所謂大人格者であるからでない。ただ私が私自身であるからである。

安眠

私は近頃になつて安眠の甘さを知つた。『左様ならおやすみ』といふ言葉くらゐ嬉しいものはない。

生活の美

私は私と同年輩の友人に遇ふといつてもいふ、『お互にかうなつては急に死ねない、どうしても七十位は、いや八十までも九十までも長命しなければならぬ。』私は二十五位までより生きたくない天才を氣取つたのはつい昨日のことのやうに思はれるに、私ははや五十の坂を越した。然し實際は人間生活の美を味ふのは今後のことであらう。如何に太陽が照り、如何に花が咲き、如何に川が流れ、如何に鳥が飛び、如何に草は青いか……それ等の美を見る眼がやつと今開いて來たやうに思はれてならない。

私の詩

若し英語を、讀むための文字であるとするならば、漢字は眼で見ても楽しむために作られたものだ。そして私の將來の詩は、讀むため見るためでなく、その香氣をかぐ爲めのものでなければならぬ。

變人的

私は果して詩人であるかどうかは知らないが、私は日常生活に詩を運び入りたい。私の詩が私に裏切りしない場合に、私は最も詩的な人間であることはいふまでもない。私が最も習俗的である時は、私が最も變人的である場合である、即ち最も眞實である場合である。

文藝復興

私は自分の憤怒を表現するのに沈黙サイレンスを用ひたい。人間が最も完全に強い時始めて沈黙の言葉を使ふことが出来る。私は沈黙の祝福を受けて自分の文藝復興ルネサンスを實行したい。生活の上に特殊の色調を持たないものは詩人とはいふことが出来ない。

近代的

若し私が近代的に見えるならば、それは私が人情的であるからである。若し私の詩の意味が不分明であるならば、それは私の心が一ぱいで歌へないからである。

橋

或人は私に向つて、『君は極點まで日本人で、しかも極點まで外國人だ』といふ。私はその人によく見て呉れたと感謝する。極點の日本人として私は情熱に動かされ、極點の外國人として私は私の藝術を客觀視することが出来る。私はそれ等の兩極端を結びつける一個の橋だ。

第四表象抒情詩畢

昭和二年六月十日印刷
昭和二年六月十五日

第一刷千五百部發行



野口米次郎定本詩集

第四卷 表象抒情詩

定價一圓八十錢

著作者 野口米次郎

發行者 長谷川巳之吉

印刷所 萩原印刷所
製本所 黒岩製本所

東京市芝區下高輪町二三番地

發行所 第一書房

電話 高輪一四二二三
五六一〇七四

第一書房刊行書目

上田敏遺著	上田敏詩集	四六判七百六十頁 背皮金泥美本	定價 三圓八十錢
野口米次郎著	第一表象抒情詩	四六判四百四十頁 背皮金泥美本	定價 一圓八十錢
野口米次郎著	第二表象抒情詩	四六判四百四十頁 背皮金泥美本	定價 一圓八十錢
野口米次郎著	第三表象抒情詩	四六判四百五十頁 背皮金泥美本	定價 一圓八十錢
野口米次郎著	第四表象抒情詩	四六判四百五十頁 背皮金泥美本	定價 一圓八十錢
堀口大學著	詩集砂の枕	四六判二百八十頁 表紙木判美本	定價 二圓
堀口大學著	譯詩集月下の一群	菊判七百六十頁 背皮金泥美本	定價 四圓八十錢 普及版二圓五十錢
堀口大學譯	譯詩集空しき花束	四六判五百五十頁 背皮特製美本	定價 三圓五十錢 紙型燒失絶版
堀口大學譯	ヴェルレエヌ詩抄	四六判二百九十頁 挿繪十二枚美本	定價 二圓五十錢
アホリネエル著 堀口大學譯	動物詩集	四六判ジュエライ 繪入金泥美本	定價 二圓
佐藤春夫著	佐藤春夫詩集	菊判本又二色刷 表紙木判美本	定價 二圓八十錢
日夏耿之介著	日夏耿之介詩集	全三冊豫約非賣品	讓價 五十圓
三富朽葉遺著	三富朽葉詩集	四六判八百四十頁 背皮金泥美本	定價 四圓五十錢

第一書房刊行書目

三木露風著	三木露風詩集	四六判七百九十頁 背皮特製美本	定價 三圓八十錢
西條八十著	西條八十詩集		近刊
萩原朔太郎著	萩原朔太郎詩集		近刊
室生犀星著	室生犀星詩集		近刊
茅野蕭々譯	リルケ詩集	初版別製	近刊

野口米次郎
トツレクツブ

各冊十六錢 送料四錢

第七編 歌麿北齋廣重論

菊判特製本
定價一圓六十枚別
録入册

第廿編 春信清長寫樂論

菊判特製本
定價一圓六十枚別
録入册

第一編 芭蕉論	第十三編 小泉八雲論	第廿五編 米次郎獨語
第二編 光悦と抱一	第十四編 萬葉論	第廿六編 米次郎講演
第三編 松の木の日本	第十五編 神祕の日本	第廿七編 霧の倫敦
第四編 能樂の鑑賞	第十六編 詩の本質	第廿八編 愛蘭情調
第五編 米國文學論	第十七編 人生五十年	第廿九編 海外の交友
第六編 光琳と乾山	第十八編 蕉門俳人論	第三十編 外人の心理
第七編 春信清長 <small>傳</small>	第十九編 眞日本主義	第卅一編 畫壇の人人
第八編 寫樂 <small>傳</small>	第廿一編 戀愛の詩人	第卅二編 舞臺の人人
第九編 芭蕉村俳句選評	第廿二編 自然禮讚	第卅三編 詩人の郷土
第十編 芭蕉俳句選評	第廿三編 印度の詩人	第卅四編 書齋の消息
第十一編 芭蕉俳句選評	第廿四編 米次郎隨筆	第卅五編 藝術の 東洋主義
第十二編 芭蕉俳句選評		

此叢書は著者の定本全集と
なるとも、編者以て完了
したいたす

